

文化勲章受章者 相良守峯東大名誉教授のお土産

(2021年4月18日) 庄司英樹

鶴翔同窓会の大先輩 文化勲章受章者の相良守峯氏の直筆原稿コピーが手元に残っていました。貴重な直筆原稿なので掲載を山形鶴翔同窓会事務局にお願いしました。

先生宅に「創立百周年記念TV番組」に取材でお伺いした際に「お土産」としていただきました。

原稿の経緯についてはこのHPの第一回の投稿「文化勲章受章者 相良守峯東大名誉教授のお土産」を参照してください。

東京・世田谷のお宅に伺いして帰るときに「お土産になるでしょうか。もし使い道があったらお持ちください」と「庄内 自然と人文」と題した原稿を下さいました。400字詰め原稿用紙数葉をホッチキスではなく、先生自ら和紙を擦ってつくった「こより」で綴じてありました。「ぜひとも有効に活用させていただきます」とありがたく頂戴してきました。

「庄内—自然と人文」はさっそく山形新聞の夕刊の文化欄に掲載してもらおう一方、母校に相良先生の「書」はあるかどうかを中村昭太郎校長先生に尋ねたところ、色紙が一枚あるだけとのことでした。

そこでこの原稿を母校に寄贈し在校生だけでなく、同窓生にも「直筆の原稿」を見てもらうことにしました。ところが、山形新聞に相良先生の原稿が掲載されると県立図書館から「目下建設中の遊学館に郷土が生んだ先人を紹介する「県人文庫」コーナーを設ける計画があるが、ここにぜひとも先生の貴重な直筆の原稿を展示しておきたいので寄贈してもらいたい」との申し込みがありました。

どうするか迷った末に、当初の予定通り「この原稿は母校の百周年記念番組制作でお土産にももらったものであり、すでに鶴岡南高校にもその旨を伝えてある」と丁重にお断りするしかありませんでした。

当時、県庁におられた富塚陽一さん（元鶴岡市長）にお話して相談したところ、「原稿を表装して母校に寄贈した方がいい」とのことでした。「表装代は私が負担してあげますから、原稿を届けて下さい」と心強いお話です。

一ヵ月後に富塚さんから画帖仕立てになった作品を受け取った私は無事に母校に寄贈することができました。

身辺整理したところ、表具された原稿のモノクロのコピーが手元に残っていました。表具された表紙も参考まで下記に貼りつけます。（2021年4月18日）庄司英樹

庄内の自然と人文  
相長す峯

荘内——自然と人文

相良 吉峯

山形の名のようた、奥羽の中心山形盆地に  
は蔵王山脈が横たわり、また県の西部、荘内  
平野の背果は月山、湯殿山、羽黒山の認め  
ゆる出羽三山が睥睨して遙かに西方日本海を  
遠望し、その北は秋田県との境は、さき方が  
多富士山を偲ぶせう鳥海山が聳え立ち、さう  
は県の南境には朝日岳、南東境には吾妻山が  
横たわりと、この果合に、三方の果境には高い  
山々が聳えてあり、西方に切り、広に日本海が横



存ありといふ地勢に異境の区切られといふ關係  
上、日本人の活動範圍も自<sup>オカ</sup>から区切られ、農産  
物をとり上質の物と限られ、いふとは言いな  
から、米産はありに局限される恨みがあると  
いふ。

しかし上記の山々はいちれも高峯を抜き、

靈界の甚濃く登山者の魂と引きつける靈山  
であるが、山形群の自然にして異境の旅人の  
心を引きつけるものはひとり山々向けひなく、  
それぞれり山蔭に混々と湧き出て、病み癒れ

右旅人の癖心身を癒し、こゝから出る温泉もまると  
こゝろに見えぬ。——主要な温泉を挙げてお  
かたは、温海温泉、湯跡浜、湯田川、また山  
形盆地は上の山、赤湯、赤倉、米<sup>沢</sup>には五  
色温泉その他。

上記の山岳と対をなす大河は、事を次が如  
く、四つの中境の廻りから蛇々と北上する最上河  
が、<sup>カ</sup>端がて急流の大河となる。その平野を貫き、  
西方日本海に入つて、酒田港に注ぐ。これが日本  
下を<sup>カ</sup>貫流した景観の美を深ん、また山

形は<sup>カ</sup>端を<sup>カ</sup>端として、農林の肥沃を助けること大なる



唯一の大河である。今上陸下が大正十四年に  
攝政として山形縣に行啓の折、左の御製を賜  
わつたという。

山形縣民歌「河水清し」

廣き川を流れゆけども最上川

海に入るまでにはさらさらけり

右のような地勢に基いて、夏は暑く冬は雪  
の深い気候の下に、山形縣は敵えて温暖で暮  
らしよい天地を恵まれてはいたかつたのに、よ

現代の山形縣文化を予見せしところの  
行政機構が早くも誕生し、その行政の中心と  
なつた首府は県を四地区区に分割した一つ、荘内に  
置かれたが、他の三地区は最上、ミカミ 村山、ムラヤマ 置賜  
であつた。

しかし室町時代から近世初頭までは専ら  
力を張つてゐた村山地方の最上氏と、荘内地  
方の武蔵の邊に創り暮れ、ついに  
に最上氏が置賜以外の全領域を占領するに至  
つたが、美濃 美濃も長きに亘つた、江戸時代には  
荘内は酒井氏、置賜は上杉氏、最上は戸沢氏、

他は小藩や幕領が群立し、上記の旧地域も更に分装するに至った。この状態が続くこと約二百五十年、幕末に至って全地域は戊辰戦争に巻き込まれ、大伴親幕側に立つものが多かったけれども、結局山形県や諸藩は政府側に軍を出し、屈服した。この終戦の際、政府軍の総司令西郷隆盛の荘内側に対する取扱いは、極く寛大であった。<sup>福</sup>倒した荘内士族は、深く彼を崇敬し、これが縁となって一九六九年（昭和四四年）以後、今日に至るも吾が慶見



馬場市に駿河市とは兄弟都市の縁も結ぶことと  
す。 現今の山形縣が誕生したのは明治六  
年八月である。 吾が成慶の役を終ったのは明  
治六年の事である。 在りては（のち伯耆）と  
あつた。 西井<sup>（西井）</sup>忠篤は慶應の會社を創りて  
留學した。 彼自身は和口イロシの陸軍に入ら  
し。 帯同した馬場<sup>（馬場）</sup>忠篤は大志を以て學業を研究し  
た。 明治十年陸軍が戦死した。 明治十二  
年、この馬場忠篤は國體を護りし。 凡そ山形県各方の  
住民は平地を越えて渡りて渡られた人々の子弟の  
子弟を生かしてゐる。 其の年、教人を擡出する。 日

義光（出羽の太守、山形城守となる）、並楯大  
學（荘内狩川の城主、用水堰を開削し、灌漑  
して大功をたてた。清川八郎（姓名を齋藤正  
明と言ひ、十八才にして江戸に出て文武両道  
を学ぶ。自ら塾を開いたが、山岡鉄舟等と共に  
尊王攘夷の志をたて、東奔西走した）、  
幕府の刺客に暗殺された。菅実秀（西紀一、八  
三〇生）（荘内藩の重臣、維新の指導者。藩の  
勤政を指麾し、旧藩士の生活と救うた）松ヶ  
岡の開眼に努力。また西郷隆盛と肝胆相照ら


し、西南の役にあらつては去就を誤ることなく、  
莊内の危険を救つた功績は大きい。一方  
吾友文人としては高山樗牛（西記一、八七一―生）  
があり、鶴岡市出身で、二歳にして伯父高山  
氏の養子となる。東京帝大を卒業したが、学  
生時代の志望小説「瀧口入道」が首席者選し  
て一躍文名を馳せる。博文館に入社、雑誌「  
太陽」で文芸批評に健筆を揮つた。浪漫主義  
的思想から二一午エ主義に、さらに日蓮の宗  
教思想に移るなど轉々としたが、その文才の秀  
麗なまゝとは一世を風靡するものがあり、晩年に



は文学博士の学位を受けた。さらに鶴岡市出身の陸軍軍人としては陸軍中將、関東軍参謀として石原莞爾（西紀一、八八六生）があり、満州国の建設に<sup>ビシヤイ</sup>尽くす<sup>大</sup>たが、日中戦争では「不拡大を主張したが大いなり、東條英機と鋭角的に対立し、その意の中將のまま予備役編入となつて飽海郡に帰郷<sup>の身</sup>たが、独自の理念に基つき連盟運動を鼓吹し、また終戦に際しては極東国際軍事裁判酒田臨時法廷に証人として出廷し、自説の正当性を力説した。

その後には自己の戦争論と日蓮の理念を  
中心として戦争絶滅を説く「世界最終論」  
その他多くの著述を残している。齋藤茂吉（  
西紀一、八八二）藏王山麓の農家に三男として  
生まれ、長じて医師齋藤家の養子となり、東  
大帝大医学部を卒業したが、精神病医を志し  
た如く少年時代の興味を持っていち和歌の道  
に進んで正岡子規及び伊藤左千夫に師事し、  
短歌雑誌「アララギ」を刊行すると共に詩集  
「素光」（一九一三）を出版し、歌壇に新風を吹  
き込んできたのとて広く大きな影響を及ぼした。三

の後由精神病院を經營すると共に、  
家として江湖に名を成し、  
藝術院會（？）とな  
り、さらに學士院會をも受けた。

水陸の風光明媚なる山々らの山形縣は、人  
文の行路にも恵みを与えてゐるのか、世にすぐ  
れた人材を産すること少なからず、世に紹介し  
た人物は上記以外多々あるが、紙数がここ  
には尽きたので、山形縣の物賄人財のなほ豊富か  
らうんことを祈りつつ筆を擱くこととする。  




と云く古き山形物人はよ

く自~~己~~己の生活圏を切りこらいて、自分の個性に  
 適した環境乃至文化を創造しを由のと思われ  
 る。こくようにして造られた文化は、まず紀  
 元一世紀以前に、インド又は中国から波及し  
 を由のと思われれる稲の栽培を始めとし、  
 五年には出羽の国に及ぶ西南からの文化の北上  
 は、この地方を急速に開発させて歴史時代の  
 黎明を思えることとす。

たもの~~あり~~あり(終)  
 であるう